

Eureka VII

六年制通信 No.22 令和2年10月30日(金)号

日本語あれこれ

映画の感想、あらすじ、読んだ本の要約、感想文、風景の描写、考えたこと感じたこと考えていることの説明・プレゼンなど、言葉を使ったコミュニケーションは私たちの生活の中にたくさんあります。挨拶のような定型のものなら考えなくても反射的に出てきますが、相手によくわかるように言葉を紡いでいこうとすると、これがなかなか難しいですね。面接を控えている受験生は、考えていることを言葉にするのは意外に難しいことに気づいたんじゃないかな。どうすれば言語表現が、つまり頭の中を言語化することがうまくできるのでしょうか。

豊かな語彙とたくさんの比喩表現が使えること、そのためには多くの本を読むことが大切ですと、これは何度も言われてきたことと思いますが、確かにその通りだと私も思います。類似と対比を考えながら対象をよく観察しなさい、これもまたその通りでしょう。しかし、実はその前にあるいはそれと並行して、遠回りに思うかもしれません、私たちは日本語の特徴について知っておく必要があると私は思います。これは昔、金田一春彦が言っていたことですが…。例えばこんな話があります。光源氏はどんな髭をしていたか、という問題です。これが誰にもわからない。光源氏は美男の代名詞のように言われますが、『源氏物語』には目鼻立ちについて一行も書かれていません。西洋の文学では目の色まで詳しく書かれることがあります、日本人は身体表現が希薄です。源氏であれば「光り輝くよう」とか女子が「源氏を見るとぼ一っとなる」とか、そういう印象を書くわけです。人物の描写でも年齢は出てきますし、着物は詳しく書かれます。しかし首が長いか短いとか、どんな顔だとかについては関心が薄いとしか思えません。例えば「あし」といっても、腰から下を全部指すのか靴に入っている部分を指すのか曖昧ですが、そういうことには日本人はこだわらないのです。一方で「顔つき」だとか「面差し」だとか感覚的な表現を好むようです。

また、例えば「水」といえば、単に H_2O のことだとは考えず、私たちは「水」に付随する映像を浮かべます。日本人に共通の映像は、まず「きれいなもの」、そして「冷たいもの」、「飲めるもの」、そういうイメージでしょう。水は買うもの、そんなイメージは普通持ちません。滝でも、流れる水は「そのまま飲めるくらい清らかなもの」と思います。川を描けば水色に塗りますよね。しかし、これら「水」にまつわるイメージは日本人独特のものです。川を描けと言われて茶色に塗る民族はたくさんいますから。リンゴも赤いと思っていますが、リンゴを描けと言われて薄緑色に書く国も多くあります。そんな国で「リンゴのようなほっぺしてかわいい」と赤ちゃんを誉

めたら喧嘩になるでしょうね。

私たちは「つい」「どうせ」「さぞ」「やっ」となどの副詞に、辞書的意味以上に感情を込めます。ですから、こういうのは数学の文章題には絶対に出てきません。「どうせ二等辺三角形なので」とか「一辺 6cm の正方形をつい二等分してしまうと」とか「やっ」と書いた円を」とか見たことないでしょ。

同義語の多さも特徴です。中でも人称を表す語は異常に多いですね。you は君、あなた、お前、貴様、お主、あんた、古くはその方、そち、などなどまだあるでしょうし、それに方言が加わります。wife は妻、家内、奥さん、奥方、かみさん、かーちゃん、女房など、これまた多数、そしてこれを私たちは使い分けています。考えてみればすごいことですね。「こちらは」なんて一人称にも三人称にも使える不思議な言葉もあります。「こちらは土日も働いているのに…」は we または I ですが、「こちらは僕の高校時代の同級生でね」は英語では he に当たるものです。自分でもよく混乱せずに使い分けているものだと思いますか。

その他、私たちは日本語の特徴を世界の文化と比較しつつ認識しなければいけません。自分が使おうとする言語を客観的に知ることは大切ですからね。君たちはすでに英語を学んでいますから、英語と日本語の違い（双方の文化を反映しているはずの違い）を意識して勉強すると面白い発見があると思いますよ。

今週のおすすめ

- ・ 内館牧子 『夢を叶える夢を見た』（幻冬舎）

夢を追った人と夢を追わなかった人。それぞれがまた二分されます。夢を追って叶えた人、夢を追ってダメだった人、夢を追わなくてよかったと思っている人、夢を追わなくて後悔している人。合計 4 パターン。私たちはこのいずれかに分類されるようですね。内館さんは夢を追うことを本書で「飛ぶ」と表現しています。彼女自身 OL から勇気をもって飛んだ人、そして飛んでよかったと思っている人です。

彼女から見てそれぞれのパターンに該当する人たちに取材を申し込み、彼ら彼女らの発言を記録したのが本書です。飛んだ人間が何を考え何に迷いどんなきっかけで飛べたのか、あるいは飛びたいと思いつつなぜ思いとどまったのかについての綿密なレポートは、若い君たちにも是非読んでほしいと思います。内館さんは自分の体験に照らしながら、それぞれに共通点を見出そうとしています。

私も本書を読みながら自分の人生を振り返っていましたが、飛ぶか飛ばないか、確か二度ほど迷ったことがありました。ほとんどの大人が何らかの岐路に立ったことがあったでしょうし、君たちも必ずその経験をするでしょう。

飛ぶには才能が必要ですが、本書の中でボクシングのトレーナーが才能とは何かについて発言しています。興味深いので紹介しておきましょう。才能とは「教えることが不可能な領域を、教えなくてもできる能力。天から授かって生まれてきたとしか考えようがない」ものだそうです。深く共感いたします。

BGM は MAN WITH A MISSION の *Remember me* でした…。